

キリスト者障害者通信

き
ぼ
うNo.78
2021.12.1

特定非営利活動法人兵庫共励会
〒105 姫路市御幸区中野田四-1-6 二八
番
TEL 〇七九-二三五-八八一九
FAX 〇七九-二三五-一〇一六
振替 〇一一五〇-五-四二七五八
発行者 廣 田 守 男
印刷所 新 生 会 作 業 所

「インマヌエル！」



東島美穂 牧師

日本キリスト教団 大阪城北教会

牧師 東 島 美 穂

兵庫共励会につながる皆さま、ご無沙汰しております。私は大阪で二度目の冬を迎えようとしています。この度、「コロナ禍の中でのわたし」というテーマで寄稿してほしいとお声がけいただき、「きぼう」に連載することができたことを心から感謝いたします。皆さんそれぞれにコロナ禍で様々な「初めて」を体験されたことと思います。

私も二〇二〇年四月、新たな教会での一歩を踏み出した途端、緊急事態宣言が発令され、その後も繰り返された宣言や「まん防」により、礼拝は休むことなく継続してきましたが、「共に」集まる・交わる・触れ

るということから離される「初めて」の日々が長い間続きました。

以前、「三・一一」を心に刻む特集記事の中で「コミュニケーションできない現実が、物語が生まれない状態だ」と語られた人がいますが、コロナ禍もそうであったように感じています。個々の物語は確かに紡がれていたけれど、その個々である「わたし」の物語や、何かの出来事や体験、関わりや交わりを共有することで生まれる「わたしたち」の物語に傾聴し、共感し、触れ合う時と場が極端に奪われてしまったコロナ禍でした。

そのような大阪での始まりの時を歩む中で、三年前に召された義父の山口壽明教師が最期に書き残してくれた「神に命令」という詩を思い出しました。「わたしは自分の願いが成就するように、熱心に神に祈った。しかし神は沈黙したままだった。『どうして』と私は思った。そして私は気づいたのだ。自分の願いが達成するように、神に命令していた自分に。」

この詩が心を通っていた今年の受難節に出会わされたものがあります。それは十字架上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と激しく問い、「願わくは、この苦しみを取り除いてください」と熱心に祈ったイエスです。しかし神は沈黙したままだった。自分の願いが達成されない、コミュニケーションできない現実があった。けれども、そこに神は共におられた。「わが神」という呼びかけはそのことを表しているのだと気づかされました。コロナ禍という荒野で「共におられる神が何をしてくださるのか」を早速に求め、「願いが成就するように」祈っていた自分がいいます。しかし神は沈黙したままだった。けれども、「インマヌエル」とは、神が何かしてくださる以前に、コミュニケーションできない現実のただ中に、「神は共におられる」ということだと気づかされた時に、先

に紹介した特集記事の言葉の続きを思い出しました。「しかし、いつかそこからも新しい物語が生まれる日は来るでしょう。事実、三日目にイエスは復活されました。新しい物語の始まりです。それぞれの人生において三日の長さは違います。ですが、他者との出会いの中で、いつかまだ見ぬ物語へと転換、すなわち回心される日が来るのです」。

コロナ禍を通して、それまで当たり前のように思っていた、受け流していたことが本当は有り難いこと、素敵なことであることにも気づかされました。静まりかえったコロナ禍で迎えた春には、ブンブンと羽音をたてて庭を飛び回る蜂に、金子みすゞさんの「蜂と神さま」の詩が通り、「神さまはここに」を思い、夏には鳴り響く蜂の大会唱に、何年も土の中で生き抜いた時間があるからこそ響くいのちの声、尽くされるいのちの使命があることを思い、秋には、礼拝堂に響き渡る青空音楽隊の演奏に、園児たちと想いつきり楽器を鳴らして踊り、「ぼくらはみんな生きています」ことを思い、このクリスマスには、土の中と思えた教会に思いもよらないところからつなげた若い人が洗礼を受けることになり、計り知れない導きを思い、「しかし、いつかそこからも新しい物語が生まれ、いつかまたみぬ物語へと転換される日が来る」ことを想いつつ、

ここで二度目の冬を迎えようとしています。辛く悲しいこと多いコロナ禍と共に迎える年の終わり・始まりの時、皆さんののちに「インマヌエル」が満ち溢れますように、その折りを込めて最後に、ボンヘッファーが獄中で書き記し、讃美歌にもなっている「主のよき力に守られて」を届けます。

「主のよき力に、確かに、確かに、取り囲まれ、不思議に守られ、慰められて、私はここでの日々を君たちと共に生き、君たちと共に新年を迎えようとしています。過ぎ去ろうとしている時は、私の心をなごませ、悪夢のような日々を重荷は、私たちをなごませ続けています。ああ主よ、どうかこのおびえおののく魂に、あなたが備えている救いを与えてください。あなたが、もし、私たちに、苦い杯を、苦渋にあふれる杯を、なみなみとついで、差し出すなら、私たちはそれを恐れず、感謝して、いつくしみと愛に満ちたあなたの手から受けましょう。しかし、もし、あなたが、私たちにもう一度喜びを、この世と、まぶしいばかりに輝く太陽に対する喜びを与えてくださるなら、私たちは過ぎ去った日々をすべて思い起こしましょう。私たちのこの世の生のすべては、あなたのものです。あなたがこの闇の中にもたらしたろうそくを、どうか今こそ暖かく静かに燃やしてく

ださい。そしてできるなら、引き裂かれた私たちをもう一度結び合わせてください」。

あなたの光が夜の闇の中でこそ輝くことを、私たちが知っています。深い静けさが私たちを包んでいる今、この時に、私たちに聞かせてください。私たちのまわりに広がる、目に見えない世界のあふれるばかりの音の響きを、あなたのすべての子どもたちが高らかにうたう讃美の歌声を。

主のよき力に、不思議に守られて、私たちは来るべきものを安らかに待ち受けます。神は、朝に、夕に、私たちと共にいるでしょう。そして、私たちが迎える新しい日々にも、神は必ず、私たちと共にいるでしょう。」



コロナ禍のなかで

日本バプテスト同盟

二見キリスト教会

信徒 谷 合 公 江

教会は高齢者が多く、三密規制やワクチン接種への対応から、主日礼拝はオンラインと文書配信による家庭礼拝になりました。

対面での交わりは減少したが、スマホのグループ・ラインで、牧師のメッセンジャーをゆっくり読み、声を出して気がねなく讃美歌を唄い折ることが出来たので、教会の礼拝同様、み言葉の恵みを深く味わうことが出来ました。

キリスト教を基盤とする「兵庫共助会」「神戸YWCA」、私が活動継続中の「神戸医療生協」や「九条の会」も委員会、研修会、總會等の大人数が集う会は、人数制限、ネット配信、書面決議等、通常とは違う形で行われました。

共に集うことの出来ない規制に戸惑いながらも、ZOOMやYOU TUBE等の現代人の情報機器を何とか操作して、普段めったに見ることが出来ない他教派の礼拝や活動も知ることが出来て思わぬ恵みを頂きました。

神戸に居住して四十余年、阪神淡路大震災の時は五十才台でボランティア活動に走り回りました。コロナ禍中は後期高齢の喜寿の年、近隣地域のひとり暮らし高齢者を、医療生協の助け合い活動で、ワクチン接種や日常の困りごと、相談に対応してきました。我が身の老いと病いは「外なる人は衰えても内なる人は日々新たにされている」というみ言葉に支えられて、喜寿の年の、たくい稀なパンデミックを「希望を持って喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず折りなさい」のみ言葉を体感しつつ、主の道をいきいきと生かされたいと願っています。

コロナ禍での私

日本イエス・キリスト教団

神戸中央教会

信徒 山下 妙子

先日、友人と二人でランチを久しぶりに楽しみました。

本当は四人ですつもりでしたが、二人の友人は遠方なので強いて誘いませんでした。感染者が減少しているとはいえ、油断できません。

コロナ禍で外出を自粛しているために、ストレスが溜まり身体の不調を訴えている

高齢者の方が多くいると聞いています。

大正生まれの私の母親の姉が幼少時に、当時流行したスペイン風邪で亡くなったことを聞いています。なすすべもなく幼い子供を亡くした両親の悲しみは如何ばかりと思います。

身近にこのようなことがあったことを聞いていますので、ウイルスの恐怖が迫ってきました。

しかし、このような中で天地万物を造られた神様を信じ折ることが出来ることが如何に絶大な事であるかを教えられて平安と感謝の日々を過ごすことができたのは私だけではないと信じています。

私は月に数回でしたが高齢者施設の看護の業務に入らせて貰っていました。

エッセンシャルワーカーの皆さまの日々神をすり減らして毎日献身的に対応されている姿に接することができたのは、私の後半の人生に計り知れない影響を与えられたことは幸いなことでした。

神様と人々とに仕えるということを施設で働いている方々の姿から教えられました。

たまにしか勤務していなかった私に、このような緊迫したなかでも、笑顔と励ましで接してくれたスタッフに感謝しありません。

多くの人生を歩んでこられた高齢の利用者さんの穏やかな表情に接し、何とかこの

時を乗り越えてゆこうと懸命に努力されているスタッフ一同の折りが伝わってきます。このような中、田中邦夫氏と奥様の著書「障害を語る役目」という本に出会えたことも私にとってタイムリーでした。

「我が助けは、天と地を造られた主からくる」

詩編121・2

「兵庫共助会の今後について」 ご意見を寄せたい

兵庫共助会 理事会

兵庫共助会は設立されて間もなく五十年を迎えようとしています。

現在、五十年記念誌を発行するために、編集委員会を開催し、記念誌の内容について協議しています。

記念誌には、会員皆さまから、「共助会と私」と題した証しを募集する事も考えています。

私たちが所属している教会も高齢化して、将来が案じられています。私たちの共助会も高齢化が進み、若い会員が大変少ない状況で、何とかしなければならぬ段階にきていると思います。

理事会では、共助会の将来構想について考えている最中です。

皆さまにお伝えしています通り、2020年に以前役員をされていた、古澤輝勝兄から多額の献金を頂きました。現在古澤基金として預金をしています。

また、古澤兄所有の明石市魚住にある、シオンビルが共助会に寄贈される事も決定しています。

私たちは、組織の基盤強化と水統のためにNPO法人格を取得しました。

しかし、私たちの会は高齢化が進み、会員が減ってきている状況にあります。

これを打開するため、今迄の活動を継続しつつも、新しいことを計画して、実行して行かなければ、会の活性化と水統は見出さないのでないかと思えます。

NPO法人ですので、定款の変更をすれば、障がい者の支援や、福祉的・文化的な活動は可能な状況です。

会員の皆さまが求められている事はどのような活動でしょうか。

兵庫共助会は私たちに与えられた物を、皆さまや社会に役立つ事業に使っていく事が会の存続につながるのではないかと、考えています。

理事会では、障がい者が相談できる場所、障がい者が気軽に集まり交流できる場所、障がい者の居場所の設置などの具体的な案が出ています。

コロナ禍が収束して、皆さまと集まる事が可能になれば、共助会の今後について、皆さまのご意見をお聞きする機会を持つことも計画中ですが、現段階では集うことが困難な状況であると思えます。

皆さまもいろんなご意見、ご要望をお持ちの事と思えます。

何でも構いませんので、事務局の石川久子姉宛にメモでも良いですので、ご連絡いただければ幸いです。

理事会で皆さまから出されたご意見を参考に協議させていただきたいと考えています。

編集後記

コロナ禍のなかで、すべての行事を中止せざるを得ない状況で、皆さまとお会いできない期間が長くなってきています。

現在は感染者数が減少し、通常の生活に戻りつつありますが、第六波が来るとの報道もなされていますので、安心できない状況です。

このような中で機関紙「きぼう」が皆さまとの関係を築く大切な媒体となっていると思えます。今号は、コロナ禍の中で神様に支えられて生活されている状況を中心に編集させていただきました。

どんな困難な中にもインマヌエルの神様が共にいてくださる事を信じて、希望をもって歩んでゆきましょう。